

研修会のお知らせ
31 ページ参照

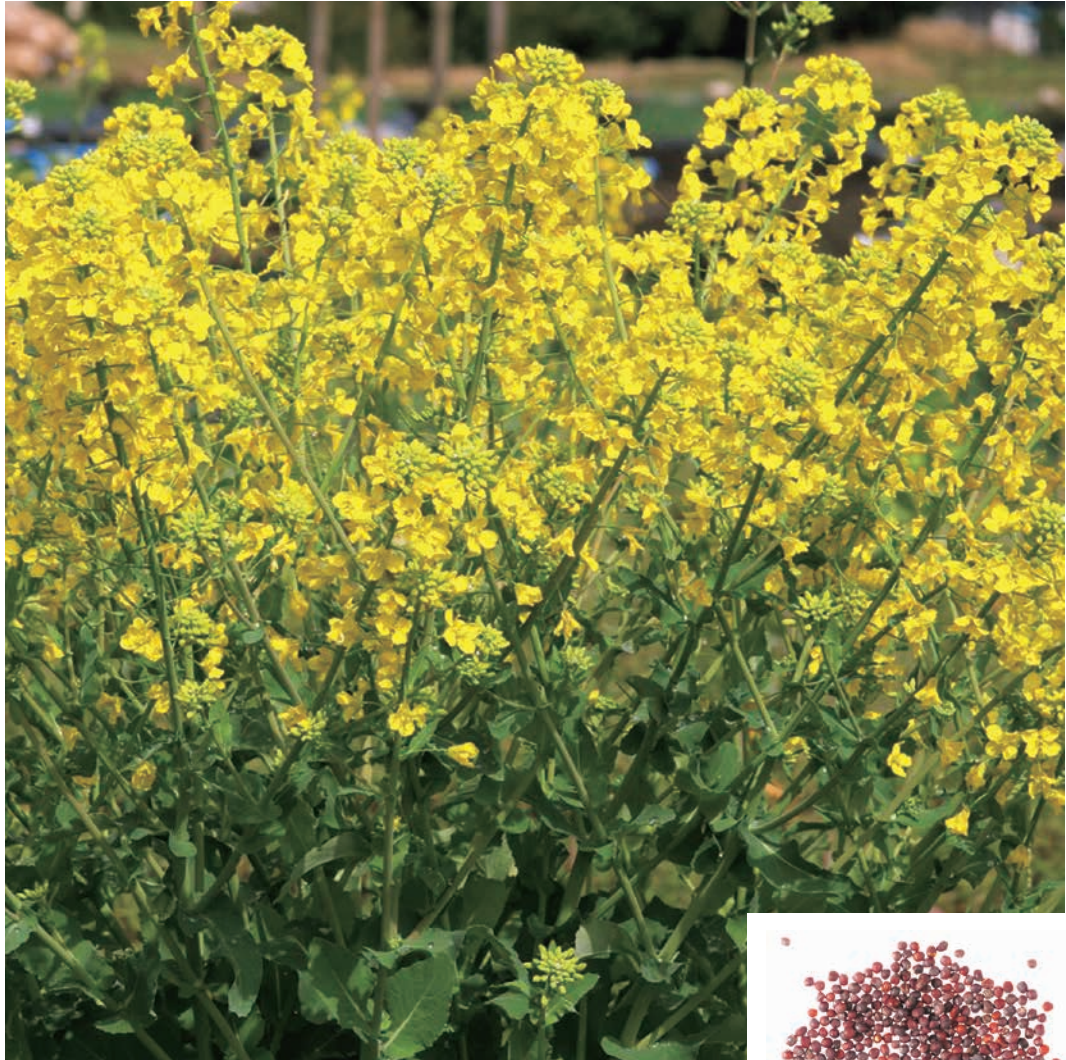
平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成27年2月1日発行

2015.2
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

2号

第37巻
No.307



カブ *Brassica rapa* L. var. *glabra* Kitam. (アブラナ科 *Cruciferae*)

生薬 ブセイ（蕪菁）、ブセイシ（蕪菁子）カブの塊根と種子。

成分 アミノ酸、ブドウ糖、ペクチン、ビタミンC、isothiocyanete 等。

効能 民間では便秘に根や葉を食べる。しもやけに根をすりおろして患部に塗布する。円形脱毛症、おでき、そばかすに種子をすり潰し患部に塗布する。



生薬 カブ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



春の七草の一つ。属学名の *Brassica* (アブラナ属) はラテン語のキャベツ (*B. oleracea* var. *capitata*) のことで、この属には現在栽培されている多くの野菜が属しています。特に種小名 *rapa* (カブの意) には変異が多く、アブラナ (var. *nippo-oleifera*) やミズナ (var. *laciniifolia*)、ノザワナ (var. *hakabura*)、コマツナ (var. *perviridis*)、ハクサイ (var. *pekinensis*)、チンゲンサイ (var. *chinensis*)、ターサイ (var. *narinosa*)、サイシン (var. *utilis*) など重要な野菜がカブの仲間たちです。

原産地は地中海沿岸の南ヨーロッパや西アジアと言われ、栽培の歴史は古く、古代エジプトのピラミッド建築に駆り出された奴隷の食べ物であったと言われていました。ディオスコリデス (40-90頃) の『薬物誌』に *Gongulisk* の名で収載され、かぶを煮食すると痩せる効果や催淫効果が期待でき、煎じ汁は痛風やしもやけの温湿布剤としたり、利尿作用がある事が記されています。栽培は古代ローマにも伝わり、ヨーロッパ全域に広がって行きました。どのようなやせた土地や寒冷地でも栽培可能なことからヨーロッパ北部でも栽培され、ロシアの古い民話に「おおきなかぶ」の話があるように今でもロシア料理やスウェーデン料理に使われています。また、飼料用作物としても多く栽培されているようです。

中国に伝わったのは2000年以上も前のことで、『詩経』(前8世紀頃)に「葍」の名で記され、また『爾雅』(漢代初期)にもその名が見られます。蕪菁、蔓菁などと呼ばれる以外に三国志で名を知られる諸葛孔明の名を採り「諸葛菜」と呼ばれることもあります。孔明が軍隊の非常用食料として重用したことによると言われています。その他の本草書にもどんなやせ地でも育つ救荒作物として記されています。李時珍 (1518-93) は「蔓菁といふは芥属のもので……夏の初に臺が起ち、四出で芥のやうな黄色の花を開き、やはり芥のやうな角を結び、その子は平均して圓く、芥子に似て紫赤色だ」と述べていて、カラシナ (*B. juncea*) の仲間であることを明らかにしています。

多くの品種が育っている日本には弥生時代に中国から伝わったと言われ、『日本書紀』(720)や『本草和名』(918)、『和名抄』(931-937)に記載があります。江戸時代になるとますます栽培が盛んになり、『農業全書』(1697)には詳しく栽培法が記載され、天王寺かぶと近江かぶの二品種が記されています。「天王寺かぶ」は大阪天王寺付近が発祥で西日本の主要栽培品種で、扁球形白色の中型かぶ、煮食や漬物に適しています。「近江かぶ」は扁球形白色の大型かぶで、滋賀県大津市内で盛んに栽培され、カブラ蒸や漬物として利用されていましたが、享保年間 (1720頃) に近江かぶから選抜された聖護院かぶ (千枚漬けやかぶら寿司の原料) に押され、栽培は少なくなっています。
(村上守一 記)